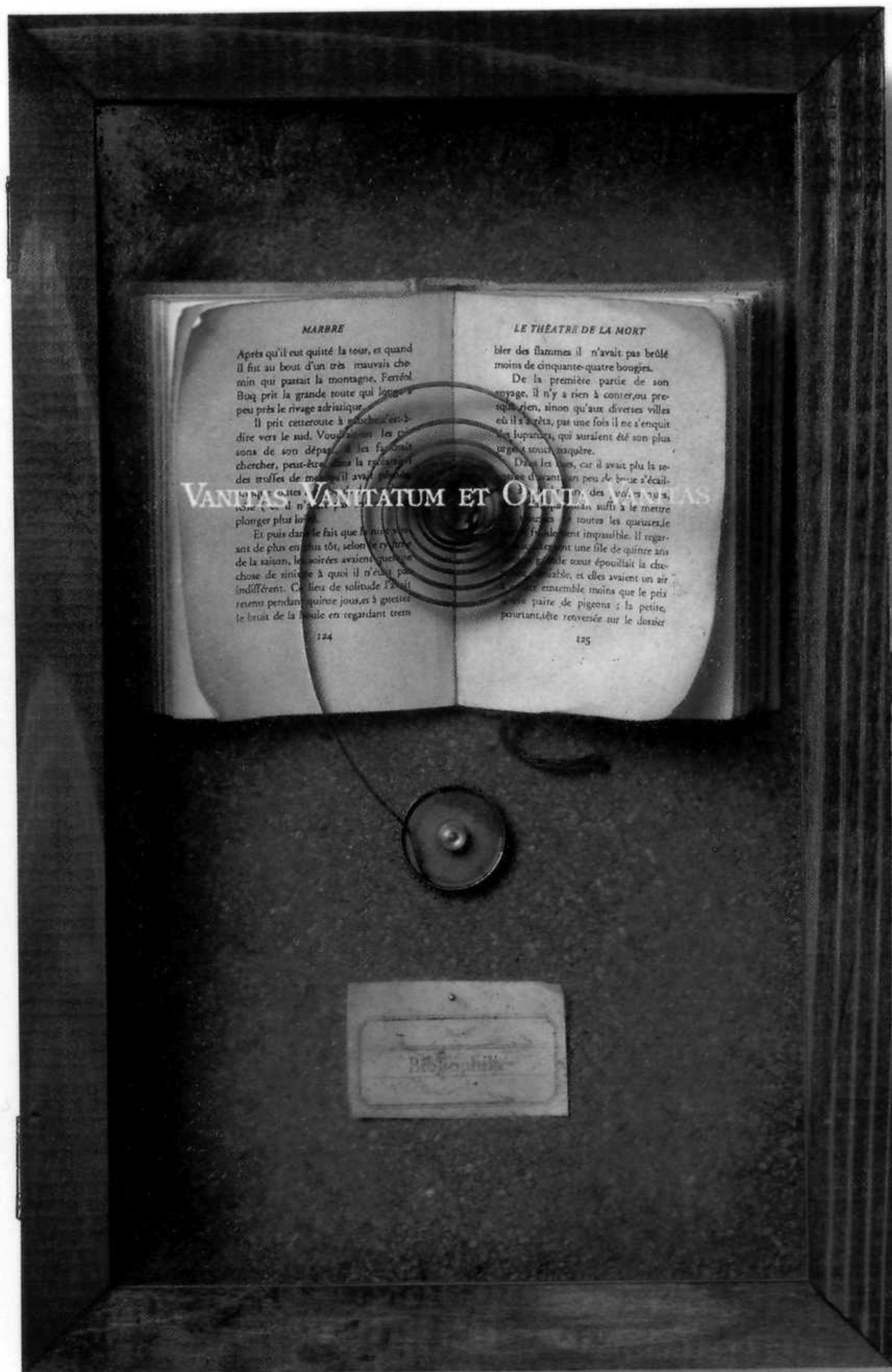


中川素子◎著



聖書からマルチメディアまで

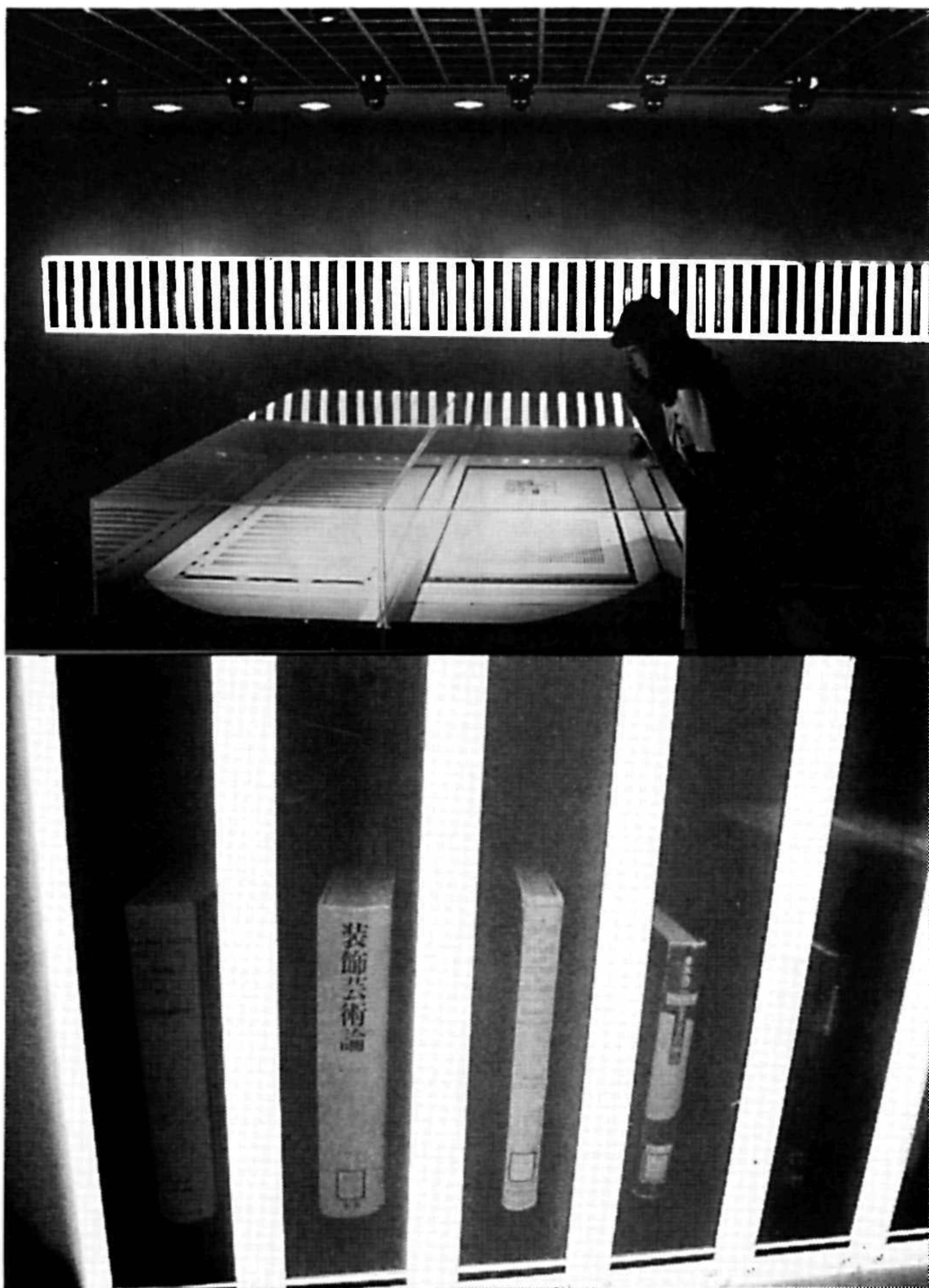
# 本 の 美 術 誌



ウエンヨン&ギャンブルのホログラム・アイコン

ウエンヨン&ギャンブルは、こういった本の変容をテーマにしているアーティストである。マイケル・ウエンヨンは物理学と光学を、スーザン・ギャンブルは美術を学び、二人は一九八三年から共同制作を開始している。二人は、サセックスの王立グリニッジ天文台図書館でニュートンの『光学』の初版本をみ、文化や文明の象徴としての本に興味をもったという。また、一九九〇年から二年間、筑波大学に招聘されていたが、その間に筑波大学の図書館を観光客のように回遊して楽しんだらしい。

「物理的な物としての書物は、魔法の窓のように、文化と文化の間のコミュニケーションの道を開きます。書物は、誤解を招くかもしれないし、誤訳を生むかもしれませんが、個々の知覚を離れた物



ウェンヨン&ギャンブル「ビブリオグラフィ」。ガラスケースの中はコンピューターとレーザープリンターで描いた本(上)。壁面にあるのがホログラム(下)。  
東京都写真美術館「インスタレーションエイジ展」1992。

としての書物そのものは、どこに行っても同じだからです」(水戸芸術館クリテリウム4)と、時代や国境を超え、本が生き続けてきたことを感じてきた二人は、それだけに終らず、ハイテクノロジーが情報をより多く、より広く、より早く伝えることも知っていて、次のように語っている。

「私たちはまさに今、本というものの形が、情報技術の出現と共に変容しはじめる時代にいるのかもしれません。たとえ本が今のままの形で残っていくにしても、その役割は問い直され、また新たな提案とその提示がなされる時期にいるのです」(P3 ウェンヨン&ギャンブル、レクチャー&ワークショップ リーフレットより)。

本の役割が、新しいメディア時代にその形態と機能とを変え、今の本のイメージが、「思い出や記念品」、つまり最終的には消えてなくなり過去のものになることを、二人はホログラフィで表現している。ホログラムとは、レーザー光線を使った三次元写真のことである。暗室の中で、本の前に透過性のある写真用の乳剤を塗ったガラスのプレートを置くと、レーザー光線はこのプレートを通過して本を写し出すことができる。

記録された本のホログラムは、幅と高さと同行をもち、実際の本と同じ形をしている。また、実際に通りでタイトルもはっきりと読みとれる。しかし、緑色っぽくみえる本は、妙に物質感がなく、はかない感じでもどかしい。ホログラムとはしよせん仮象であり、さわることも、ましてもつこともでき

ない。この頃よくきくヴァーチャル・リアリティという言葉の意味と違い、ホログラムは見え方そのものがヴァーチャルなのだ。たとえ彼らの作品が歴史的資料になりうるとしても、本が追憶のかなたのアイコンという存在になることを、このホログラム作品はあまりにずばりと表現してしまった。

ウエンヨン&ギャンブルは、「情報テクノロジーの進歩により変容していく本について考える時に、テクノロジーを使うのはおもしろい」と、コンピュータとレーザー・プリンターを使って本を描いたりもしている。しかし、皮肉なことに、すでに日本を去った彼らがイギリスやアメリカから送ってくれた資料をみると、この最も新しいコンピュータードロウイングによる本の作品も、追憶のかなたのアイコン性を確実に表現している。本を愛する二人は、本の運命を過剰な思い入れをせずに、きちんと把握しているのだ。

#### 著者紹介

中川素子(なかがわ もとこ)

一九四二年、東京に生まれる。東京芸術大学美術学部大学院修了。文教大学教育学部教授(造形美術論)。著書に現代美術の視点から新しい絵本論を展開した「絵本はアート——ひらかれた絵本論をめざして」(教育出版センター)があるほか、新聞や雑誌の読書欄、文化欄などで絵本論、現代美術論を執筆している。

#### 本の美術誌

発行日——一九九五年一月二〇日

著者——中川 素子

編集——十川治江+柏原亜紀子

エディトリアル・デザイン——宮城安総

カバー写真——岡田正人

手動写植印字——東京オペレーションズ

印刷——株式会社新栄堂

製本——田中製本印刷株式会社

発行者——中上千里夫

発行——工作舎 editorial corporation for human becoming

〒150 東京都渋谷区松濤2-21-3 phone: 03-3465-5251

ISBN4-87502-247-6